強きを助け弱きを挫く

酒を飲むと、きまって「強きを助け、弱きを挫く。これが役人の道だ」とうそぶく男がいた。そして、彼は同僚たちをしり目に部長職ぐらいまではたどりついていた。強い者には弱く、弱い者には強いのは、何も県庁だけではないが、県民が考える以上に、その体質は強くそこに根を張っている。

数年前、別府で老人ホームを食いものにした暴力団まがいの汚職事件が発覚した。それに対する県の対応にこうした体質が強くあることが問題だと、本欄でも指摘した。すると、「県庁にいたくせに県の悪口を言う」と、元の後輩たちからの非難。県庁の内部にいたからこそ、その非が鳴らせるし、鳴らさねばという私の心は、彼らには届きそうもなかった。

今回の県歯科医師会長不正事件で、県はまた、その体質を完全に暴露した。自ら不正を摘発したのに、強い外圧に屈し、何もなし得なかった。まさに無法状態。この無力無法に対し厚生省や世論の圧力が強まると、今度は方向違いの会長辞任要求。民間

団体へしてはならない官庁の内部干渉。無法不法の上塗りである。

私にもこれと似たいやな思い出がある。知事は木下郁氏から代わって間がない。日田市某病院の不正処分をめぐり、強大な圧力がかかったが、保険医取り消しが行われた。しかし、半年もせぬうちに、私を素通りするがごとく（私は部次長にすぎなかったから）、保険医再指定がなされていた。普通は二年以内許されない。

後日、知事は弁解して「吉田君、大分・別府の病院なら徹底的にやるよ。日田だからそうしなければならなかった」と。退職するまで私はその知事の前に顔を出すことはなかった。「質実剛健」の木下知事の下でこそ、強い者にも強くあり得た自分の弱さが、今でも責められてならない。

（一九八八年十月二十六日）